

## 学び続ける子どもの育成（1年次）の成果と課題

### 1. 学び続ける子どもの育成を目指して

学ぶことは、生きるために必要かつ基本的な活動の一つであるといえる。学ぶことは、年齢を問わないし、ヒト以外の動物全般でもみられることである。例えば、乳児であっても、次第に「寝返り」から「はいはい」、「つかまり立ち」などの仕方を学んでいくし、動物であっても、訓練すれば盲導犬のようにかなりの能力をもつことができる。

動物は生得的に学ぶことができることを能力として備えているが、ヒトの学びと動物の学びは大きな違いがあるように思える。それは、ヒトは学ぶことの楽しさを知っており、知的好奇心にあふれているという点である。自ら、知ろう、学ぼうとする力を備えているのである。ヒトは本来学びに対する「内発的動機づけ」が高いといえることができる。イルカショーで、イルカがみせてくれる芸は大変素晴らしいものであるが、イルカ自身は、次はこういった芸を憶えたいなどと思っているのだろうか。

動物の訓練とヒトの学びは、学びの質が大きく異なるのである。動物の訓練では、報酬や賞罰の効果を巧みに使っていくことも多い。このような動機づけは「外発的動機づけ」と呼ばれ、もちろん、小さい子どもにはこのような方法を使うこともある。

しかし、人間の子どもは、どんなに小さくても、これができるようになりたいとか、これについてわかるようになりたいと心の奥底から思っている。内発的動機づけが高いことは、他の動物と大きく異なると考えられる。最初は、真似ごとかもしれないが、それが大事である。大人のやっていること、例えば、手づかみでしか食べられない子どもが、大人のやっているように、スプーンを使って食べたいと思って真似て、だんだんうまくつかめるようになってくる。このような繰り返しで、いろいろな能力を身につけていくことができる。このような理論を「モデリング」の理論という。

学ぶことは、学校で学習する教科の内容だけに限ったものではない。親子の間で、友だちとかかわり合う中で、社会と接することなど、生きていく中で、常に学びの場面に囲まれている。ありとあらゆる場面が、人間にとって学びの場面であることを、われわれは意識する必要がある。学校などでのカリキュラムに基づいた学びを「フォーマルな学び」、それ以外のさまざまな場面での学びを「インフォーマルな学び」として区別することもある。

しかし、現実的には、学級の中に、学ぶ意欲がなさそうに見える子どももいる。これは一体どういうことであろうか。それは、子どもたちの学びが、フォーマルな学びのベクトルとマッチする子どもたちもいれば、そうでない子どもたちもいるからではないだろうか。ここで気を付けたいことは、学校の授業の内容に対する興味・関心がみられないからといって、その子どもは知的好奇心がないわけではないということである。われわれに見えないだけであって、ある方向を向いたとても大きなベクトルをもっているかもしれないのである。ただし、子どもによっては、ある狭い領域については深い知識を持っているかもしれないが、新たな領域へ興味を広げることが十分でないこともありうる。ここに、学校教育に果たす重要な役割があると考えられる。教師、子供たちどうし、保護者、地域の人間など、多くの人間がかかわり合い、いろいろな領域にわたって学習することで、興味を新たな領域へと広げ、新たな可能性を開拓できるかもしれない。

そのために、保育・教科では、魅力的な「問題」や「課題」を扱う必要がある。そのヒントはむしろフォーマルでない学びの場面にあるかもしれない。そういった学びの場面の中から、子どもたちひとりひとりがもつ「問い」から、フォーマルな学びの場面での「問い」として焦点化していくプロセスが重要になると考えられる。そのためにわれわれができる授業中の具体的な手立てが、次期学習指導要領でも注目されている「問題解決学習」や「プロジェクト学習」などをはじめとする「アクティブ・ラーニング」である。

## 2. 本年度の成果

本年度は、まず、各保育・教科で、「一人一人が問いをもち追求する姿」とはどのようなものかを議論した。このような議論の中から、保育や各教科の特性の影響も無視できないことが見えてきた。例えば、保育や生活科の研究成果から、一人一人が問いをもち前段階として、一人一人が問いをもちことの重要性がみえてきた。これは、外的な報酬によらずとも学ぶ意欲が高い状態、すなわち内発的に動機づけられた状態ということができるであろう。この内発的動機づけが、学び続けることの原動力になりうる。

次に、問いをもち追求するためには、以下の4つのことがみえてきた。

1つ目は、メタ認知（モニタリング）が適切にできることの重要性である。メタ認知とは、例えば「目標に向かって今自分はどの段階にいるのか」、「自分が何がわかっていて、何がわからないのか」などを適切に判断できることである。メタ認知がうまくいくためには、適切な振り返り活動が欠かせない。このことは国語科や図画工作・美術科の研究成果からもうかがえる。学び続けることに大きくかかわる学習理論として「自己調整学習」の理論があるが、この理論では、内発的動機づけやメタ認知の重要性が指摘されている。

2つ目は、的確に子どもたちをゆさぶることによって、解決すべき問いが浮きぼりになることは、理科の研究成果から報告されている。自分たちの身の回りから「問い」を発見することは重要な力のひとつであるが、授業の中で多くの子どもたちに「問い」として認識するための有効な手段となりうる。

3つ目は、子どもたちがもつ「問い」の種類にも複数ありうることである。代表的なものとして「どのようにしたら良いのか？」(How)という問いと、「なぜ？」(Why)という問いがある。前者は、音楽科、保健・体育科で、後者は社会科、算数・数学科で指導提案を行った。

4つ目は、学んだことをいかそうとする力も重要であることである。これは、外国語活動・英語科をはじめいくつかの保育・教科の成果からもいえる。学んだことを他の文脈にもいかそうすることを「学習の転移」というが、これは、学校教育での究極の目標であるといってもよい。そのいかすべき文脈というのは、これから子どもたちが生きていく社会に他ならない。したがって、その文脈はリアルである、つまり「真正性」が高い必要がある。どの保育・教科も、先に述べた問題解決型の授業にすることができたと考えられるが、特に、技術・家庭科では、身の回りの問題を題材としてとりあげたことから真正性が高い指導提案ができたのではないかと考えられる。このような取り組みは、最終的に、教科の知識に結び付けられることによって、その教科の学習への内発的動機づけが高まると考えられる。

## 3. 次年度へ向けての課題

「学び続ける子どもの育成」というテーマを掲げた1年目であったが、以上に示したように、有効な成果を得られたと考えられる。しかしながら、各保育・教科とも試行錯誤の段階であり、断片的な状態である。今後、附属学校園全体の研究として、発達段階や教科の特性などもふまえた枠組みを作成し、同時にその成果を適切な方法で評価をしていく必要があると考えられる。これにより、より精緻な学び続ける子どもたちを育成するための理論を構築していくことが可能になるとと思われる。

また、関連する学習の理論や方法として、協調（協同）学習、学び合い、ICTの活用、批判的思考力の育成など、21世紀を生き抜くために注目されている能力との関連も研究していく必要があると考えられる。

（文責：島根大学教育学部附属学校園主事、御園 真史）